The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	実践から共創を考える
Author(s)	杉田, 映理; 山田, 陽子
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 115-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102522
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究会報告

実践から共創を考える

杉田 映理
大阪大学人間科学研究科
山田 陽子
大阪大学人間科学研究科

要旨

第 2 回のテーマ研究会では、杉田映理先生と山田陽子先生の実践についてご報告をいただき、社学共創の具体的なあり方とはどのようなものであるのか、研究会参加者で考えを深めた。本稿では、杉田先生、山田先生の実践報告について、当日の報告内容に沿って掲載する。

ellisugita@hus.osaka-u.ac.jp（杉田），yyamada.hus@osaka-u.ac.jp（山田）

1.　杉田映理先生の実践報告

伊藤：朝からお集まりいただきまして、ありがとうございます。未来共創センター主催のテーマ研究会の第2回目を始めます。本日は、杉田先生と山田先生から報告をいただいた後にフリーディスカッションを予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

伊藤：早速、杉田先生のご報告に移りたいと思います。では、杉田先生よろしくお願いいたします。

杉田：はい。よろしくお願いいたします。MeWプロジェクトと社学共創ということで、ちょっと駆け足で話していきたいと思います。

まず、大阪大学MeWプロジェクト[1]とは、ということについて。MeW(ミュー)は、Menstrual WellbeingのMeとWの略で、Menstrual Wellbeing by/in Social Designがコンセプトということになります。大阪大学ユネスコチェアの一研究プロジェクトという位置付けです。大阪大学ユネスコチェアが、＜Global Health and Education - Social Design for Health＞がテーマなので、それに寄せて、こういうコンセプトにしました。

トイレ内で生理用品を無償で入手できる仕組み作り、つまり、ソーシャルデザインをおこなって、それを通して、月経のある人のウェルビーイングを前進させることを目指しています。by/inとなっているのは、ソーシャルデザインをすることによってウェルビーイングが進むし、ウェルビーイングが広がることで、より良い社会が創られていくのではないかと考えているからです。人間科学研究科のHSP（ヒューマン・サイエンス・プロジェクト）や、未来共創センターのオープンプロジェクトから活動資金を頂いています。

【MeWプロジェクトの背景】

なぜ、このようにトイレ内で生理用品を、という話になったのか、

その背景を3つほどに分けて説明したいと思います。まず、国際開発の世界で、2010年代の頭ぐらいから、それまでは支援の対象とはなってこなかった月経が、女子教育の阻害要因になっているという調査結果ですとか、NGOの声が出てきました。そこで、月経対処を支援していきましょうと、徐々に国際開発のアジェンダ化していったという経緯があります。

一方で、月経は、日本も含めて、非常に伝統的な慣習があり、月経中の女性が隔離されたりですとか、各地域特有の月経観があります。そういう文化と、開発の波との摩擦がある中で、現場で何が起きているのかを探るために、科研の共同研究を3年ほど実施しました。その成果として、『月経の人類学』という本を出させていただきました。

科研の仲間は、みんな海外の地域を対象としている人類学者で、8地域の比較をしたのですが、書籍を作る段階で、1人、日本の中学生の月経対処について研究してこられた看護学の先生に1章を書いていただきました。その過程で、「いや、日本もいっぱい問題あるね」となり、やはり日本の状況もちゃんと研究しなくてはいけないし、実践もなされるべきではというのが、（MeWプロジェクトの）背景として一つありました。

もう一つの背景は、皆さんご存じのように災害大国日本ということです。2015年というちょっと古いデータですが、それでも2011年の3.11よりも後の段階で、災害備蓄品として生理用品を入れている自治体が1,741のうち、たった267でした[2]。3.11のみならず、熊本の時も、ついこの間の能登の時もそうですが、やっぱり避難所において、生理用品はあるけれども体育館に山積みにされていたりという状況で、それでは人々にとってアクセスしづらい。そのようなことが災害ごとに聞かれるという状況があります。

最後に大きな一つの背景で、日本の文脈を変えたというところでは、やっぱり日本のコロナ禍です。日本も2020年の春から、皆さん経験したように、コロナ禍となりました。ちょうど1年ほど経った2021年の3月の初めに、当時、ICU（国際基督教大学）の学生さんだった人たちが、

「＃みんなの生理」という団体をつくっていて、そこがオンライン調査の結果を発信しました。高校生以上の学生が金銭的理由で生理用品の入手に苦労したことがあると回答した人が、5人に1人いたということ。SNSでの発信がNHKのニュースなどでも取り上げられて、一挙に、「生理の貧困」という、もともとイギリスで造られたコトバで「period poverty」という現象が、コロナ禍の日本で社会課題となりました。

このような背景があって、月経研究をしていた私としては、トイレ内でアクセス可能な生理用品の仕組み作りを目指すことになりました。

【活動の変遷：フェーズ１生理用品無償提供用ディスペンサーの開発】

MeWプロジェクトのフェーズごとにお話したいと思いますが、フェーズ1が、まずはこの生理用品を取り出せるディスペンサーの開発です。生理用品をトイレ内に置くという動きは、その後日本の各所で出てきているのですが、やはりディスペンサーという「もの」があることによる、「もの」の作用というのが、私がもともと人類学者ということもあって、一つ意味があるかなと考え、ディスペンサーの開発をしようと思いました。

ディスペンサーに求めた条件（図1）は、まず個室内で生理用品が取れること。それまでの欧米での経験から、やはりトイレ内にあることが

ディスペンサーに求めた条件

① トイレの個室内に設置できる大きさで、トイレの多様な壁面に設置できる軽さ。
② 学校・避難所等に備蓄/寄贈される色々なサイズの生理用品を、衛生面も配慮して1枚/1個ずつ引き出せる取り出し口。
③ 生理用ナプキン２種、多様な文化や好みを考慮してタンポン用のディスペンサーも。選択肢があること。
④ 防災備蓄品等としてストックすることや搬送のしやすさを考えると、フラットになって組み立てが容易。
⑤ 避難所等を閉鎖した際には、環境配慮の廃棄が　しやすい。
⑥ 停電に影響されない

図1.

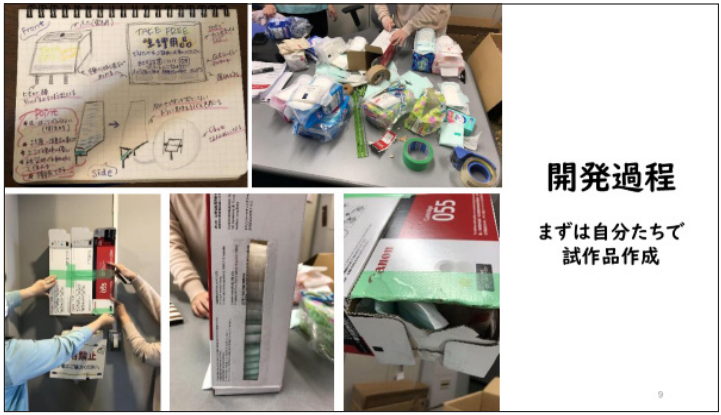

図2.

大事ということです。そして学校や避難所にも設置できること。さらに、この研究会にいらっしゃる方は理解してくださると思うのですが、やはり選択肢があることで、選択する側の主体性、エージェンシーが発揮されるということで、「選択肢があること」を重視しました。それから、避難所などへの設置を考えて、組み立て式で、停電に影響されず廃棄しやすいように、最初から段ボールで作ろうということになりました。院生とスタッフと一緒に最初どんなふうにしようかブレストして、こんな感じ（図2）で生理用品をいっぱい買って大きさを測ったりして、インクカートリッジの空き箱で試作品を作ったりしました。

（本研究会のテーマである）「共創」については、大阪市内の段ボール会社を数社当たりました。こちらの趣旨をどうも理解して頂けない会社と、さっと分かって頂ける会社がありましたが、さっと分かって頂いたタマパック株式会社にお話しをして、試作品を持って行って打ち合わせし、幾つもパターンを共に検討しました。大体4カ月ぐらいですね。実際には5月から8月ぐらいで開発をしたという次第です。

別な面で、共創というか助言をして下さった方もいました。ディスペンサーの基本デザインがほぼ完成した、2021年の8月某日のこと。大阪産業局の方とフェムテックの推進についてオンライン会議をして

いた時に、話の流れでたまたま「これ、フェムテックって呼べないかもしれないですが、実はこういうことやっていまして」と、完成間近のディスペンサーをお見せしました。すると先方に「これ、絶対特許を取ったほうがいいですよ」と言われたのです。最初は「特許、何かお金の臭いがして嫌だな」という感じがあったのですが、その後いろいろ調べてみると、特許を取ることによって知的財産権が守られ、逆の立場になって他者が特許を先に取ると、自分がやってきた研究が阻止される可能性もあるというようなことを聞きました。（MeWプロジェクトが所属する）阪大ユネスコチェア運営室の会議の時に、特許という話が出ていることについてご相談を皆さんにしたところ、「やってみようじゃない」となり、ユネスコチェアの山中先生に学内の知的財産室につないでいただいて、申請をしました。知的財産室を通じて弁理士事務所と契約をし、さらにこの時の人間科学研究科の会計係が非常にサポーティブで、いろいろ一緒にやって下さりました。それでも、かなり大変で、この夏休みはその申請でつぶれたというぐらい大変でした。そして9月下旬、特許申請が提出できました。

【フェーズ2 実証実験@人間科学部内】

特許申請が完了するまではディスペンサー（MeWディスペンサー）を公開してはいけなかったのですが、申請完了の翌日、忘れもしない9月26日に一挙に人間科学研究科（人科）内のトイレにディスペンサーを設置しました。院試がその翌日に控えていて、やはりその前に設置をして、人科の取り組みとして受験生にお見せしたいという想いがありました。実際に、これまで受験生（だった人も含む）から何人もにお礼を言われてます。受験で大阪大学に来て、急に月経が始まってしまい、「もうどうしよう」と思った時にトイレにこれがあって本当にほっとしたというようなエピソードです。

当初は、人間科学研究科の女子トイレ内の共用部分と各トイレの個室内1つ、それと多目的トイレに設置し、合計27台で始めました。生理用品の利用状況を、学生チームがアプリを作って消費個数を毎週モ

ニタリングしながら、生理用品を補充するということをしました。

くわえて、QRコードをディスペンサーに付けて、オンライン質問調査をしました。それ以外にも、授業などで、ディスペンサーを利用していない学生対象に声を拾いました。そうした調査の結果、今日は時間の関係でご披露できませんが、ほんとにこちらがウルウル来るような反応があって。もともと普及につなげたいとは思っていたのですが、やっぱりこれを全学展開したいという思いが強くなって、フェーズ3、全キャンパス展開を図っていきました。

【フェーズ3 全キャンパス展開】

D＆Iセンターに大学全体での導入を提案したのですが、これもユネスコチェアの山中先生が、センター長にご紹介くださったというきっかけがありました。

「共創」と言ったときに、いろんな共創相手があると思うのですが、学内の別組織との共創というのも、とても重要だと感じています。

あと、もう一つ全学規模での生理用品設置を後押ししたのが、当時大阪府が災害備蓄品を寄付していたことです。これも先程のコロナ禍の流れと関係あるのですが、備蓄品だった生理用品の寄附利用が可能で、予算的にもそこで少し負担減できるねっというので、実現しました。今では生理用品のトイレ内での無償提供事業は、D＆Iセンターのほうで阪大の取り組みの一つとして位置付けて下さっています。今年も去年も、阪大全体の総合報告書に、D＆Iの取り組みの一つとして取り上げられるというような状況になっています。これはとても嬉しいことです。

私たちとしても、単にディスペンサー作りましたで終わりではなく、Googleマップでディスペンサーが学内のどこにあるか分かるマップを作ったり、ディスペンサーの横にQRコードを付けて、生理用品がなくなっている時に、そこでスキャンすればMeWプロジェクトとD＆Iセンターに情報が行くという仕組み作りなどもしてきました。

多様なアクターとコラボ・共創という点では、阪大のエコ・レンジャー

さん（障害者雇用枠のスタッフ）に生理用品の補充をお願いしている部局もありまして、それがディスペンサーの改良に繋がった例もあります。生理用品補充をだれが担当するかは、人科は学生ボランティアですが、清掃員にお願いしている部局もあれば、エコ・レンジャーさんにお願いしている部局もあります。エコ・レンジャーさんがトイレの清掃を普段からしているからなのですが。そことのやりとりをする中で、補充をする時に、「こういうほうがやりやすい」とアドバイスを頂いて、それによってディスペンサーのデザインを改良したりしました。（例えば、補充する際の生理用品の向きを、蓋のフラップに図示するなど。）

一方、女子学生自らがモニタリングしているからこそ、こうしたほうがいいとか、ああしたほうがいいとか、いろいろフィードバックがあり、生理用品の補充作業をアウトソーシングしない良さも感じています。あと、大阪府内のいくつかの高校にもMeWディスペンサーを導入したのですが、やはり多様なアクターとコラボすることによって、ほんとに新たな視点を理解できたり、共創の良い面は非常にあると感じています。

【フェーズ4、5　普及・アウトリーチ】

フェーズ4、ディスペンサーの普及段階についてお話します。MeWディスペンサーの設置を阪大内で全学展開した時に、D＆Iセンター長がNHKに出演されたことで、他の大学や自治体から、うちもこれ使わせてもらえないか、買えないかという要望を頂きました。私たちとしては、普及をしたい意図もあり、是非、としたかったのですが、知財室とタマパック株式会社との間で、要するに特許申請をしているので、ライセンス契約を結ぶまで時間を要しました。

その後、いろんなところからディスペンサー入手のご要望があって、2024年末までの集計で、全国で5,000台程のMeWディスペンサーが導入されたという状況になりました。私たちもメディアから声をかけて頂いたら積極的に出るようにして、それでどんどん認知度が広まっ

ていったということもあるのかなと思います。

フェーズ5、普及体制のさらなる構築ということで、2023年7月に日本電商という企業と協定を結びました。MeWディスペンサーへの要望がどんどん広がって、それまでは私が頂いた要望をタマパックさんにつなぐことをやっていたのですが、かなり大変になってきて、どこか販売代理店がないか探していたところでした。そこに渡りに船で、日本電商さんという商社からお声がけがあって、ではお願いしますということになりました。

この未来共創センターのオムニサイト協定は、いわゆる経済的な協定ではないのですが、オフィシャルな関係としてこの協定を結ぶということをしました。この時に、タマパックさんともオムニサイト協定を結びました。

大学は考え方を生み出すことが得意で、企業はやはり売ることが得意ということで、お互いの得意なことを活かして、共に課題解決に挑む。共創の一つの形かなと思います（図3）。

図3.

アウトリーチ活動については、ここに書き切れないぐらい色々なこと行っています（図4）。例えば、UNIVASという大学スポーツの推進

団体と（人間科学研究科の）先生がつながっていて、UNIVASとコラボしてオリンピックのメダリストを招へいして、月経とスポーツをテーマにシンポジウムを開催したりですとか。台湾のNGOを訪ねて意見交換会をしたりですとか。大阪・関西万博も、阪大の万博推進室副室長の新藤先生という方がいらっしゃって、非常にMeWプロジェクトを後押しして下さっています。来年の万博にも、生理用品無償提供用のディスペンサーをトイレに置く[3]という取り組みと、シンポジウムや展示を2つほど行う形で、参加予定です。

図4.

それから、能登半島支援もさせていただきました。ました、と過去形になってしまうのは、よくないのですが。この活動では、災害支援のNPOと連携したりですとか、あと阪大の「チーム能登」というプロジェクトがあったと思うのですが、そこから資金頂いたり、一緒に能登へ何度か行ったりしました。

あともう一つ、ちょっとご紹介したいのが、TGPという、東尾理子さん―多分私たちの世代はみんな知っていると思いますが―東尾さんが代表するNPOとコラボをしています。東尾さんは、いわゆる女性のリプロダクティブ・ヘルスについて啓発する団体をつくっています。MeWディスペンサーとコンセプトを普及することをして下さっていま

す。やはり知名度が高い方なので、NHKのニュースにもなりましたし、秋田でテレビ放送もされています。

こうしてお話すると、共創はキラキラして、とてもいいことばかり、という感じですが、そうでない時もあります。たとえば、商業主義に呑まれてしまうことも正直あって、そこは非常にやきもきしているところです。私たちの理念と、企業が重視することが必ずしも合致しない時もありますし、ディスペンサーを購入した組織がこちらのロゴの上にステッカーを貼ったり、「共創」ではありませんが、模倣品が作られたケースもありました。知的財産室もだいぶ相談に乗ってくれましたが、実は知的財産権で守られる範囲というのは、結局のところとても狭いようです。一方で非常に丁寧に、大阪大学の研究成果であることを示そうとしてくださる組織もあります。

国立大学が進める共創って何なんだろうと、私自身改めて考えさせられているところです。ということで、ご清聴ありがとうございました。

伊藤：ありがとうございました。私から1点、先生にお聞きしたいことがあります。お話の中でも、難しさ、共創って一体何だろうというような、お話しいただきましたけれども。社学共創ということで、大学も進めていますが。その社会、学、そして共創というふうなこと、先生がどのような、それぞれイメージを持たれているかということお聞きできればと思います。

杉田：まず「社」といった時に、「産」、要するにいわゆる企業もあるし、自治体などもあるし、他の大学や学校もあるし、NPOなど団体とかもあるし、「社」の中にいろいろ含まれるということを、何か共通認識として持ったほうがいいのかなと思います。「共創」については、ほんとに言葉だけで聞くと美しいけれども、難しいところもいっぱいある、というところでしょうか。清濁併せ飲むしかないのか、それともその濁の部分を切り捨てるのか、諦めるのか。そこは、葛藤しているところです。

伊藤：ありがとうございました。それでは、杉田先生のパートはここで終了ということにしたいと思います。ありがとうございました。

2.　山田陽子先生の実践報告

伊藤：では続きまして、山田先生のご報告ということで、山田先生、よろしくお願いいたします。

山田：よろしくお願いいたします。社会環境学講座の山田です。専門は社会学です。今回のご依頼を頂いた際に、10分～15分程度で社学共創の活動について話すということでしたので、IMPACTオープンプロジェクトと、そのほかに最近進めている研究プロジェクトについてもお話しすることで、「社学共創」について皆さまと共に考える材料を共有できれば幸いです。

一つ目は、IMPACTオープンプロジェクトの「多様性の中のウェルビーイング」、二つ目に、自殺に関する質的調査、そして三つ目が、アーティストとのコラボレーションによる作品製作を通して学術的概念―私の場合は「感情資本主義」ですが―を発信するという研究プロジェクトです。

■「健康で自立した」労働者像の問い直し―「多様性の中のウェルビーイング」

まず、IMPACTでの「多様性の中のウェルビーイング」ですが、これは2023年度から始めて今年度も継続しています。近年、職場や働き方のダイバーシティ、働く人の健康やウェルビーイングが重要な社会課題の一つになっていますが、このプロジェクトでは、近代的な、もしくは労働基準法に規定されているような働き方の枠にとらわれず、「働くこと」自体の多様性や歴史に注目することで、「健康で自立した」労働者像自体の問い直しを試みるものです。

それには様々な切り口や方法が考えられますが、昨年度と今年度は、芸術と労働、障害と労働、芸術と障害をテーマとしました。障害者アートの展覧会や障害のあるダンサーさんのライブパフォーマンスの鑑賞

会、シンポジウムとディスカッションというプログラムで「多様性の中のウェルビーイング－芸術・雇用・社会」というイベントも開催しています。シンポジウムには、障害者アートの当事者である障害者ダンサーの方、障害がある方が表現者として参加する舞台芸術の専門家、大阪大学の芸術学の研究者の方にご登壇いただきました。学内他部局や外部団体との連携のもと、障害者アートの実践者や一般の方とともに議論することができ、大変貴重な機会となりました。多様な立場の方々にご参加いただいて議論ができたため、それぞれの持ち場での小さな変革が進んでいくことを期待しています。

本イベントの開催に至るまでの過程では、画家や舞台芸術の専門家から、障害者アートの芸術としての価値や、アートを介した障害者雇用の現状について何度かレクチャーを受けました。また、重度心身障害者施設に赴き、重度の心身障害のある方が作業療法士や理学療法士の方とともに絵を描いていく様子を視察させていただきました。そちらの施設では、日々のリハビリの一環で描画するのですが、療法士の方は、利用者の頬の赤らみやまばたきの仕方といった非常に微細な身体の変化から、当人の「描きたい」という意欲や意志を読み取り、気分が乗らない場合は途中でも筆を止めたり、初めから描かないという形で接していました。本来はリハビリの用具であるものに工夫をこらし、障害の状況が様々である利用者さん一人一人が絵を描けるようにするための道具に個別に仕立てなおしていました。療法士の方は利用者中心の姿勢を徹底しており、通常の意味での「リハビリ」を超えた、日頃から個々の利用者さんの生活や心身の状態を深く理解しているからこそ提供できる絶妙なケアとアシストを提供していました。身体がほぼ自由にならない方々がそうして描きだした絵には、ご本人とそれを支える方々皆さんの生、日々の暮らしが凝縮して表現されています。画用紙に一筆、あるいは点が一つだけ描いてあるのであっても、それが描かれた背景まで込みで「作品」でした。

イベントでは、作品の横に絵の成立過程や何を描いているのかについて詳細なキャプションをつけて展示し、制作過程の映像も流して、

来場者に自由に観覧いただきました。さらに、東京パラリンピックの開会式でソロダンサーとして出演した経験のある障害者ダンサーの方にコンテンポラリーダンスの演目を披露いただきました。その後、シンポジウムとディスカッションという流れです。

研究プロジェクト全体を通して、障害者アートの当事者と支援者、舞台芸術関係者、芸術学や社会学の研究者という異なる立場の方々と交流し、議論し、社会に発信する場と機会の創出に努めてまいりました。それにより、一般的な芸術と障害者アートとの垣根や障壁、芸術と労働・雇用、障害と労働について、様々な論点を確認することができました。

たとえば、障害のある方が表現者として描く絵画は、「アウトサイダーアート」というジャンルで取引がなされ、流通することが多いのですが、作品を継続的に創作できる環境が整わなかったり、ご本人の心身の状態から作品をコンスタントに創作できなかったりということがあり、継続的な雇用につながりにくいといわれています。また、アウトサイダーアートの作品の取引や流通に関する事柄が統一されておらず、アーティストの著作権や著作人格権が守られなかったり、正当な報酬が障害者本人に入らなかったりという問題もあるということです。一般に、芸術を生業とすることは一部の才能と運のある人に限られると言われますが、障害のある方がアートを仕事にする際には、さらに様々なハードルが高くなっているのが現状です。一点数万円から数百万円の値がつく作品を出し続け、アトリエを構えている方もいますが、それは稀なケースです。

一方、アーティストの方でも、それを糧に自立したいとまでは考えていない面もあるようで、むしろ、「自分たちの表現を知ってほしい、見てほしい」という純粋な思いから表現活動をしている方も多いようでした。この点は重要で、「障害者芸術の作品の著作権・著作人格権を守り、適正な価格で売買する流通ルートを確立する」といった持続可能な雇用の仕組みづくりに関する議論も大切ですが、プロジェクトを通して、芸術と労働を結びつけること自体を再考するところから始めることが重要だと考えるに至りました。というのも、正当な報酬や流通ルー

トの確立にのみ議論を集中させることは、芸術が有する、既存の社会秩序や価値の序列へのアンチテーゼや異議申し立ての力を骨抜きにしてしまうことになるためです。

また少し別の角度からの話になりますが、最近の社会学的な議論を踏まえますと、現代社会は、仕事やライフスタイルなど何かにつけて「クリエイティブであれ」（A.マクロビー）という圧がかかりやすく、様々な領域で「独自性」（A.レクヴィッツ）が求められる時代ですが、狭義の芸術労働の地点から観察してみれば、そうしたものがいかに消費社会的な発想にもとづいているかが分かりました。

昨年度と今年度は障害者アートと労働・雇用というテーマを中心にしましたが、今後も、誰も周縁化されることのない職場や労働の在り方について現場の方々とともに具体的に考えるとともに、より広い視野から、1日8時間/週40時間を基本とする働き方や「健康で自立した」労働者像とそれを前提とした社会の仕組みや画一的な社会規範を問い直し、よりよい未来を展望し共創することができればと思っています。

■「死にたさ」とともに生きる

つづいて、二点目の自殺に関する質的調査とフィールドワークについてです。これは、以前から私が働く人の自殺やメンタルヘルスについて研究してきた延長線上で、最近は自殺予防NPOで聞き取りをしていたものです。コロナ禍での自殺と自殺予防の実際や、NPOの活動などについてフィールドワークをしていたのですが、そうしているうちに、自殺予防相談員の方を対象とする研修で講師としてお話をする機会にも恵まれました。自殺予防や自殺相談の方々に社会学の立場からの自殺研究をお伝えする機会は残念ながら少ないというのが現状ですが、講師を務めることで、現場の相談員の方の声も聴いて議論し交流するという経験ができました。初めからそうすることを念頭に置いていたわけではありませんが、気が付けば、学術的な調査研究を超えた「共創」の芽につながったように思います。

また、ある自殺予防NPOの理事長には、私が担当している講義科目

のゲスト・スピーカーに来ていただき、学生向けにお話をしていただいたこともあります。それをきっかけに自殺問題に興味を持ったという学生が出てきたり、ボランティアに応募したという人が出てきたりしました。学生たちは自殺をタブー視する学校教育の中で育っていますし、私も十分に配慮をしながら講義をするよう努めていますが、だからこそと言いますか、「そんな話は初めて聞いた」「でも、すごく大事な話を聞いた」という反応も多く、柔軟に受け入れて考えてくれているように思います。社会学の質的調査、自殺予防の現場、講義と学生の間に有機的な連関が生じ、相互に影響を及ぼしあい、小さな一歩かもしれませんが、この問題について考える土壌が培われているように思っています。

■学術的概念をアートとして表現する―学術と芸術のはざまで

最後に三点目です。これは私が自発的に起ち上げたというよりは依頼されて始まったものですが、一般社団法人デサイロでの「ポスト・ヒューマン時代の感情資本」という研究プロジェクトがあります。依頼の内容は、「今、どんな時代を生きているのか」を考えるのに役立つ社会学の概念を社会に広く発信し、一般の人々とともに議論することで社会を良くすることに貢献してほしいというものでした。私は、社会学者E.イルーズの「感情資本主義」に関する学説・理論的研究を進めると同時に、その概念や内容について一般の方に分かりやすく伝えるために、参加者の皆さんが働く中で抱えている問題や悩みを感情資本主義論的に考え、話し合うワークショップを開催するなどしました。ワークショップの開催記や私のインタビュー記事などは編集者が作成して配信し、現在もウェブで閲覧可能になっています。

このあたりまでは研究者として仕事をしていればさほど珍しいことでもないのですが、こちらのプロジェクトが特徴的でしたのは、「感情資本主義」をテーマにアーティストとコラボレーションをし、「作品」として世の中に示してほしいと依頼されたことです。コラボレーションの相手には様々な候補が挙がりましたが、最終的に、メディアアーティ

ストでゲーム開発者という肩書で国内外で活躍している若手アーティストの木原共氏に決まりました。私が木原氏のインスタレーション、たとえば「自動運転車とぶつかる / ぶつからない方法」を拝見して、社会批評に富む作風を大変興味深く思ったからです。

アーティストとの打ち合わせを重ねて完成した作品は、『弁画・感情資本主義 β』というゲーム・アプリとインスタレーションです。この作品では、弁画の中で墜落間際の機内での会話をAIがモニターしてそれを数量化しており、発話者の感情資本の高低を査定し、評価しています。AIによって感情資本の程度が低いと判定された者は、墜落して死亡します。極限状態においても気持ちを乱さず、相手に対する気遣いや思いやりを示せた者、緊迫する心理戦を巧妙に切り抜けた者は生き残り、そうでない者には死が待っています。これは、現代社会に顕著に認められるような自他の感情やコミュニケーションのリフレクティブなモニタリングと、AIによる人間の感情表現や発話の数量化と評価・査定がゲームとして体験できる仕組みでした。このアプリとインスタレーションで「墜落死」として描かれているのは、感情資本が低いと評価された者のこの社会からの排除です。

すなわち、ゲームの設定とプロットそのものが現代社会に対する風刺や批評となっており、用意された空間でゲームの参加者たちが生き残りをかけて発話内容を考えている時、もしくは傍でゲームの行方を見守っている時、それらは実際の感情資本主義社会において当事者かつ傍観者として感情マネジメントや他者とのコミュニケーションに汲々となっている現代人の鏡像として浮かび上がるという空間芸術です。詳細は『ポスト・ヒューマン時代の感情資本』(山田 2024) に記述していますので、よろしければご覧ください。

このように、メディアアーティスト、ゲーム開発者、漫画家、フォトグラファー、デザイナー、ミュージシャン、作家など、日頃あまり接点のないジャンルの方々と一緒に研究プロジェクトを推進し、作品を製作した日々は非常に充実していました。世の中にはおもしろい人がいるのだなぁと、シンプルに感銘を受けることもたびたびありまし

た。それぞれがそれぞれの持ち場のプロフェッショナルであり、私がお話しする社会学の専門的な内容をそれぞれに解釈してくださって、協働しながら一つの作品にしていきました。最終的には研究の発表会と作品の展示会を開催して、来場した一般の方々からダイレクトに反応をいただくこともできました。私は日頃、研究者として主に文字を使用した論文や書籍という形でアウトプットしているわけですが、このプロジェクトでは、インスタレーションやゲーム・アプリという形で学術的な研究を昇華させ、普段とは別のチャンネルで一般の方々に届けることになり、反応を間近で見ることもできました。

様々な立場の方と、それぞれが独立しながら共振し、つながる中で、触発しあい、個々人の単なる総和ではない何かが立ち上がる瞬間を体感したように思います。E.デュルケームのいう社会分業と有機的連帯を想起させる経験だったと言えるかもしれません。大学で普通に研究していると出会えなかった人たちとコラボレーションすることで、私一人では到底たどり着けない地平に連れ出してもらいました。

デサイロ関連でもう一点興味深かったのは、特に人文社会科学を支える経済基盤についての取り組みです。私は一介の研究者として参加したのみですが、そうした立場から考えたことについて少しお話しさせていただこうと思います。

デサイロの研究プロジェクトの資金的基盤を支えてくださったのは、薬学の女性研究者で世界的な実業家でもあり、緑内障点眼薬の研究開発や製品化などで文字通り億万長者になっている方でした。その方はご自身の研究者としての歩みや、経営者としてのご経験、大学理事という立場などから、日本の女性研究者・若手研究者の置かれた状況や、人文社会系学問の経済的基盤について憂慮なさり、デサイロの立ち上げにも出資なさったと聞いています。いわば、国家による予算投入が手薄な学問分野への投資を個人でなさるという、フィランソロピーの一種として、デサイロの事業があるのだと思います。個人の成功を利他的活動に還元なさる姿勢や、優秀な若き編集者とともに人文社会科学を支えるための新たな回路を見出していく実践について心より敬意

を払いたいと思います。

そのうえで、フィランソロピーや寄附と商業主義の境界、もしくは学術的知とポピュラリティいう点について一つ申し上げておくとすれば、研究の進捗やワークショップの開催レポートなどが記事として配信されたりウェブサイトに掲載されたりする際、記事の閲覧数によってランキングされることがあります。私の場合、「感情資本主義」という概念やその周辺の議論について社会に発信し、議論する土壌をつくりだすことがミッションの一つでした。それには、感情や人格、もしくは他者とのコミュニケーションやウェルビーイングが、後期近代における労働や消費にどのように絡み取られていくのかを批判的に問うことが含まれます。であるにもかかわらず、私の研究に関する記事も結局はウェブサイトでコンテンツ化され、ページビューの数によって序列化され、他の記事と「人気」を競わされているかのような格好になってしまう。ランキングは必要だろうかと個人的には思いましたが、運営側からすれば、事業にユーザーの視線を集めるフックとして有効だということかもしれません。

私は自分ではSNSやウェブでの発信は全くしないタイプですので、そうしたランキングで、ユーザーの目に入りやすい場所に私の研究に関する記事が呈示され続けることによって、それを読んだ方から新規の仕事の依頼をいただくことがありました。学術的な方向、商業的な方向、いずれの方向にも広がっていったという感じで、大変ありがたいことでしたが、一方で、学術的であることとポピュラリティの間について改めて考える機会をいただいたように思います。

これと関連することですが、先日、ある老舗出版社の編集者に聞いたところでは、ひと昔前の新書レベルの内容がウェブ記事に降りてきているということでした。特に若い人は本よりもウェブ記事という時代だそうで、本が売れなくなる一方、ウェブである程度読み応えのあるコンテンツを無料で読むことが普通になっているそうです。このようなメディア文化の変化にともない、紙中心の出版社はますます追い込まれているそうですが、私としては学術的知の伝達や拡散にどのよ

うな影響が及ぶのか、公衆や教養層の編成のされ方にどのような変化があるのかに知識社会学的な観点からも注目しています。

さらに、ある概念や考え方―ここでは「感情資本主義」―を社会的に共有することで、どの程度人々の蒙を啓くことに貢献したかということや暮らしを良くしたのかということを「評価」するのはなかなか難しいとも思いました。少なくとも、病気の特効薬の開発と死亡患者数の減少とか、ワクチンの開発と集団接種を通した公衆衛生の向上といった類のものとは質的に異なると思います。

そして、「評価」というのは、その後のさらなる資金投入の在り方にも関わります。どのような研究に、どのくらい投資するのか、それをどのような指標によって判断するのか。どのような研究が「よい」研究で、投資する価値があると、何を持って言えるのか。デサイロさんの場合は、一人の名望家のフィランソロピー的な出資によって始まっているわけですが、今後も持続可能なシステムを構築する際に、不特定多数の人からの寄附という途も模索しているようでした[4]。その中で、研究者の書いた記事やセミナーやワークショップが「応援消費」の対象になっているように見えなくもない状況が生じています。

こうした現象については今後も引き続き考えていきたいと思っています。様々な外部とのつながりの中で共創を進めていくと同時に、大学という界の中でこそできることや、すべきこともまだまだ多くあると思っています。

■質疑応答―「社学共創」のイメージ

徳永：ありがとうございました。私の方から先生にご質問したいことが1点あるのですが、社学共創の社、学、共創について、ご自身で考えるそれぞれのイメージはどんなものでしょうか。

山田：そうですね、社学共創を充実したものにするためには、逆説的かもしれませんが、まずは自身の専門分野の基礎的研究をおろそかにしないことだと思っています。よく言われることですが、型を身に付けた者だけが型破りな研究を成しえるためです。私はここ数年の科研のプロ

ジェクトでは、社会学史について「感情」をキーワードに再考するという研究を進めてきました。こうした地味で堅実な基礎的研究は、研究者としての私の基本であり、根本を支えるものだと思っています。応用研究はそうした基礎の上に成り立つものだと思います。

大学の外で社会学の専門知を共有していない一般の方々に対してお話しする際、できるだけ理解しやすい表現や説明の仕方を心掛けているのですが、その時に正確性を犠牲にすることなく伝えていくためにも、基礎的研究は大切だと思っています。

また、大学の外の方と一緒に何かする際は、お互いに対等な立場で関わり、話をすることを大事にしています。社会学の学説や理論を当てはめて上から目線で「分析」し始めたり、「調査しに来ました」という体で傍観者として観察する態度で臨むのではなく、お互いに話をすることや、お互いに話を聴くことから、協働や共創が始まってきたように思います。

現場の人の話を尊重して、「そうなんですね」とそのまま受け止める、傾聴していると―というよりも興味深さのあまり、気が付けば熱心に聞かせていただいていることも多いですが―、そういうことをしているうちに、「それは社会学で言ったらこういうことかもしれない」といったことを相手に伝えると、「そんな視点は自分たちにはなかった」とか、「自分たちのしていることに言葉をもらった」という風におもしろがってくださることも多くありました。言語化や外部からの目線での整理の呈示を通して先方の自己認識や状況の認識が更新されると、「さらに研究の話を聞かせてほしい」とか、「何か一緒にしませんか」というかたちで、新たな展開が生じることがありました。

もちろん、研究者としての理論的バックボーンや調査者としての視線や分析的思考を忘れることはありませんが、そういうものを一旦横に置くというか、無心に、できるだけフラットなかたちで現場の方々とお話ししていく中で様々なことを教えていただきました。その結果として協働することで、社会的課題の解決に向けたアプローチができますし、その中で学術的な議論を活性化させるものもおのずと生じて

くるように思います。それが現時点で私が持っている「社学共創」のイメージです。

徳永：ありがとうございます。私は法学をしているのですが、私も同じような経験をしたことがあるので、なるほどなと思いながら聴かせていただきました。ありがとうございます。

山田：こちらこそ、ありがとうございます。

伊藤：では、山田先生のパートはこちらで終了ということで、ありがとうございました。

注

1　大阪大学ユネスコチェアMeWプロジェクトに関する詳細は、下記をご参照ください。
https://mew.hus.osaka-u.ac.jp/
また、研究会中にお見せしたMeWディスペンサーの動画のURLは下記です。
https://www.youtube.com/watch?v=YEP3UE72Iwg

2　その後の2025年1月に内閣府が公表した調査報告によれば、2024年11月時点で生理用品の備蓄がない市区町村は22％でした。備蓄状況は改善されていますが、生理用品があるということと、被災者がアクセスしやすいことは異なると言えます。

3　大阪関西万博の会場内のMeWディスペンサーの設置と生理用品の無償提供については、日本電商の協賛によるものです。

4　研究成果の書籍『生の実感とリアリティをめぐる四つの探求──「人文・社会科学」と「アート」の交差から立ち現れる景色』(De-Silo Label Books）は，デサイロに寄附をした人に返礼として贈られている。

文献

杉田映理・新本万里子（編）
2022 『月経の人類学──女子生徒たちの「生理」と開発支援』世界思想社.

山田陽子
2024 『ポスト・ヒューマン時代の感情資本』De-Silo Label Books.